

# CIFLE Report No. 10

## コミュニケーション型な英語教育実践における 発問力

田中茂範 (ココネ言語教育研究所)

### はじめに

多文化共生社会を生きるグローバル・パーソンには、異なる背景や利害、関心をもつ人々とのコミュニケーションを通して「違い」を乗り越え、問題解決や意志決定を行う力が求められる。その際、問題・イシューは何であるか (What is it?), 何をすることができるのか (What can we do about it?), そして何をすべきなのか (What should we do about it?) を明確にすることが肝要となり、そのプロセスを駆動するのが質問力と応答力である。質問がなくては互いの考えや意志を確かめることは不可能であり、質問に対する適切な応答ができなければ機能的なコミュニケーションを図ることはできない。したがって、英語教育においては、授業を通していかに生徒に質問力と応答力を身につけさせるかが大きな課題となる。

授業は大きく、内容消化型と活動型に分けることができる。教師が学習内容を提示し、それを生徒が消化 (learn) するという内容消化型の授業は、学校教育において欠くことのできない部分である。しかし、英語教育においては「英語を使う」という言語運用能力の育成が目標となることから、learning by doing を実践することは不可欠であり、doing を実践するための活動の比率を高めていかなければならない。ここで言う「活動」には「プロジェクト (project)」や「タスク (task)」などが含まれるが、「やり取り (interaction)」も主要な要素の一つである。

教室内では、教師と生徒間及び生徒同士のやり取りを中心とした授業が展開される。そしてやり取りは、質問と応答の連鎖によって紡ぎ出される。本章のねらいは、教室内やり取りにおける「発問 (asking questions)」という行為の意義を再考することにある (教室内での発問に関する代表的な研究として Sanders (1966) や Morgan and Saxton (1991) が挙げられる)。以下、発問の機能について触れ、教育的に有効な発問の条件について考察する。その後、発問タイプとその応答の仕方について概観し、コミュニケーション英語の授業における発問のあり方を論じることとする。

### 発問の機能

何かに疑問を抱き、疑問文をつくり、それを発問する。英語で言えば、having a question about something (疑問をもつ)、making a question (疑問文をつくる)、そ

して **asking a question** (発問する) となる。これは、人々の生の営みにおける日常的な言語行為である。根源的には、何かを知りたいという無意識の欲動がそうした言語行為と結びついている。幼児は質問を投げかけることで世界について学び、哲学者は発問という行為を通して常識を問い、思惟する。してみると、発問という行為は、教育の根底を成すものであると同時に、発問力を養成することは、その主要な目的となる。

Morgan and Saxton (1991) は、教室内での教師による発問の意義を以下のように整理している。

- **the act of asking questions helps teachers keep students actively involved in lessons; while answering questions, students have the opportunity to openly express their ideas and thoughts** (発問をすることにより、教員は生徒が積極的に授業に参加することを促すことができる。質問に答えることを通し、生徒は自分の意見や考えを表明する機会を得ることができる)
- **questioning students enables other students to hear different explanations of the material by their peers;** (発問をすることにより、生徒は素材に対して他の生徒がどのように考えているかを知ることができる)
- **asking questions helps teachers to pace their lessons and moderate student behavior;** (発問をすることにより、教員は授業のペースをつくることができ、生徒の行動を調整することができる)
- **and questioning students helps teachers to evaluate student learning and revise their lessons as necessary.** (そして、発問を通して教師は生徒の学習状況を評価し、必要に応じて授業を改善することができる。)

以上の意義を踏まえ、発問という言語行為(社会的相互作用)のもつ機能について考察したい。

発問は円滑なコミュニケーションを図る上で決定的に重要な要素である。なぜなら、当事者間に何らかの「情報のズレ (information gap)」がある場合に、コミュニケーションが要請されるからである。興味・関心の違いや文化の違い、誤解、知識量の違い、他者情報の不足など、全て「情報のズレ」である。

情報のズレを埋めるために求められるのが、質問を発するという行為である。しかし、英語教育における発問の役割・意義を考えるには、ここで言う広義の「情報のズレ」という概念を「発問の機能」として整理しておく必要がある。というのは、発問という行為は、欠けた情報を補充するためだけに行われるのではないからである。

発問の機能は、以下の3つに大別することができよう。

- (1) 対人関係機能 (interpersonal function) : 対人関係の形成や維持、調整を行う働き

- (2) 情報収集機能 (information-gathering function) : 世界の出来事や物事についての情報を得る働き
- (3) 意味生成機能 (meaning-creating function) : 新しい意味やアイデアを生み出す働き

これらの機能は相互排他的ではなく、関連し合っているが、あえて個別機能に焦点を当てると、上記の3つの機能に集約されるように思われる。発問の対人関係機能は、まさに対人関係そのものに関わるものであり、挨拶 (How're you doing? など) や他者配慮 (Are you OK? など), 意図の確認 (What do you mean by that? など), 依頼 (Could you give me a hand? など), 提案 (How about a cup of tea? など), 驚きの表明 (What? など) のように、多種多様な状況で用いられる。情報のズレという観点から言えば、これらは他者情報のズレを埋める働きであると言えるだろう。

会話においては、何を言うかということだけでなく、何かを言うことによって何をしたいのか、あるいは何をしたいのか、といった話し手の行為意図が重要になる。例えば、**Your dress looks gorgeous.** という表現は、内容としては「君のドレスは素晴らしい」ということだが、発話をする中で「相手を褒める」「相手を誘いたい」「自分の服装も褒めてもらいたい」など、何らかの意図が表現される。**There is a bull in the street.** という発言でも、単なる報告なのか、警告なのか、怒りの表現なのかは、状況によって変化する。行為意図を表現するための慣用化された表現—それらを機能表現と呼ぶ—は数多くあり、その多くは疑問文の形を取る。以下はその例である。

#### 依頼する

- (1) Can you open the window, please? (窓を開けてもらえますか。)
- (2) Do you mind taking me to the station? (駅に連れて行ってくれないかな?)

#### 提案する

- (1) How about going swimming? (泳ぎに行くのはどう?)
- (2) Why don't you call him personally? (自分で彼に電話をしたらどうですか。)

#### 勧める・申し出る

- (1) Can I help you with that? (それ、手伝いましょうか。)
- (2) Would you like me to take you to the library? (図書館まであなたをお連れしましょうか。)

#### 許可を求める

- (1) Would you mind if I borrowed your CD? (CDを借りてもいいですか。)

(2) Would it be all right for me to leave 20 minutes early today? (今日、20分ばかり早く退出してもかまわないでしょうか。)

#### 念を押す・気づかせる

(1) Can I remind you about the meeting at 2 p.m.? (2時の会議、覚えていますよね。)

(2) Will you try to remember to call him tonight? (今夜、彼に電話するのを覚えていてくださいね。)

#### 詳細情報の提供を求める

(1) Can you explain that in detail? (もっと詳しく話してくれませんか。)

(2) Could you be more specific? (具体的には、どのようなことになるでしょうか。)

一目でわかるように、これらの表現の多くには、**can/will/would/could** などの態度表明型の助動詞が含まれているが、ほとんどが定型化された表現である。これらは疑問文の形をとっているが、機能的にはいわゆる **yes/no** の答えを求める質問というより、「何かをしたい、何かをして欲しい」という主旨の行為意図を表現するものである。このような疑問文による行為意図の表出は、対人関係機能を担うと見なすことができる。

第二の情報収集機能は、発問の典型的な機能であるが、**yes/no** の答えを期待するもの、**A or B** で選択を要請するもの、さらに **5W1H (who, what, when, where, why, how)** についての情報を求めるものがある。例えば何らかの事件が起きた際、捜査関係者はこれら一連の質問を通して情報収集を行うだろう。また、歴史や地理、数学、物理などの教科学習においても、生徒は意識的か無意識的かを問わず、これらの質問を通して知識の構成を行うだろうし、教師は発問をすることで学習活動の流れを生み出す。

第三の意味生成機能とは、発問が新たな視点を提供し、それによって新たな物事の見方が生まれるというものである。常識を問うという哲学者の思惟は、まさにこれに当たる。発問には、われわれの思考を広げ、深めるという創造的な働きがあるのである。例えば研究論文を書こうとする際、自分なりのリサーチ・クエスチョンズを見つけられるかどうかが決定的に重要となるが、これも質問という形式を採ることで何をしたいのかが明確になり、それが研究の動因になるということである。発問の意味生成機能は教育及び学問のエッセンスであるが、英語教育においても知的な活動を牽引する役割を果たす。

#### 教育的に有効な発問の条件

以上のように、言語的に分類すると、疑問文には様々な働きがある。では、英語教育現場では、疑問文はどのように取り扱われているのであろうか。一般的にはまず、疑問文の作り方と答え方という形式面に注目し、言語的操作の仕方を指導する。そして、教

師は、練習を目的として生徒に英語で質問をし、それに対して生徒が答えるというやり取りが行われる。例えば、以下の質問と応答を見てみよう。

(1) Are you a student? — Yes, I am. I'm a student.

No, I'm not. I'm not a student.

(2) Do you like playing soccer? — No, I don't. I don't like playing soccer.

Yes, I do. I like playing soccer.

(3) What did you eat for today's breakfast? — I ate broiled salmon, miso soup and a bowl of rice.

以上の質疑応答には、文法的・語彙的な問題があるわけではない。重要なことは、質問を投げかける際に、その質問の「善し悪し」を判断する基準をプロの教師として有しているかどうかである。教師の発問はどうあるべきか。教師は何のために発問という言語行為を行うのか。こうした問いを発することは、教師が自らの教育行為を意識化することを促し、何のために教室内で特定の活動をしているのかを自覚することに繋がる。では、生徒とのやり取りにおいて発問を行う際に、考慮すべき条件は何であろうか。われわれは、以下の3つを挙げるができることと考える。

(1) 自然であること : **authenticity**

(2) 有意味であること : **meaningfulness**

(3) 自分事として捉えることができること : **personalization**

まず、教師の発問は自然であることが求められる。自然であることの裏返しとして「不自然」または「人工的」がある。自然であることは本物であることであり、そのことを英語で **authenticity** と呼ぶ。不自然なやり取りは「白け」の原因となり、白けた場では本来的なコミュニケーションは起こり得ない。したがって、英語表現と英語活動が **authentic** であることが、教師が発問を行う際には重要となる。

**authenticity** は本物志向性と結びつく。しかし、**authentic** な表現と活動であれば良いというものでもない。そこで有意味であること (**meaningfulness**) という条件が必要となる。ここで言う **meaningful** には、**comprehensible** (理解可能である) ということと、**interesting** (興味を引く) の2つが含まれる。つまり、認知的に **meaningful** であると同時に、情緒的・感情的にも **meaningful** でなければならないということである。いくら **authentic** でも、**meaningful** でなければ教育 (学習) 効果は期待できない。換言するなら、**meaningfulness** は **authenticity** の条件であり、その制約として機能する。

以上のように、**authentic** で **meaningful** であることは、コミュニケーションの基

本条件である。それはまた、生徒のやる気を高め、それを持続させる要因でもある。しかし、それだけでは充分とは言えず、生徒が言語活動を「自分事としてとらえることができる」という個人化（personalization）が充足すべき要件となる。「個人化」とはコンテクスト化（文脈化）のことであり、自分との関連性（relevance）の高い状況を設定することで、生徒は活動にリアリティを感じて取り組むことができるのである。

繰り返しになるが、発問は教室を社会的相互作用の場にする上で決定的に重要である。そして、発問を行う際の条件として authentic で、meaningful, そして personal であることが考慮されなければならないというのがここでの論点である。

さて、上で3つの質疑応答の例を挙げたが、(1)の Are you a student? が教師から生徒に向けて発せられた場合、authenticity, meaningfulness, personalization の3条件のいずれも充足せず、形式面のみに注目した機械的なやり取りとなる。(2)は、質問された生徒がサッカーを好きかどうかという情報が欠けている場合には、ここでの3条件を満たす可能性があるが、実際に充足するかどうかは、それがどのようなコンテクストで発せられるかに依る。好きなスポーツが話題となり、一連の質問を教師が行っているというコンテクストでは条件は充足されるが、そうしたコンテクストから切り離された形で発せられた場合は、条件の充足には繋がらない。(3)は生徒の数だけ応答の在り様が異なり、比較的容易にここでの3つの条件を満たす発問であるが、応答したいことが英語で表現できないという場合、やり取りが成立しない可能性が出てくる。

### 質問のタイプと応答の仕方

質問には多種多様な形式が考えられるが、それに応答する生徒からすれば、答えやすいものと答えにくいもの、答えたくないものなど、応答の仕方に強弱・濃淡が考えられる。したがって、多様な応答の仕方が言語的に示されなければ、そこには本物の、有意味で個人的なやり取りを期待することはできないだろう。言いたいことと、英語で言えることとのズレを埋めるために使用されるのが、コミュニケーション方略（communication strategies）である。以下では言語面について言及するが、疑問文を取り扱う際に、コミュニケーション方略を自覚した指導を行う必要があるというのが論点となる。

疑問文は、何かの情報を求める際に用いられる。期待する答えによって、yes/no あるいは 5W1H についての情報の提供を求める場合がある。それぞれ yes/no 疑問文、Wh- 疑問文と呼ばれる。また、疑問文の形であるものの、相手からの答えを期待せず、感情的な表現を行うという修辭疑問文もある。例えば Do I look a fool? は形式的には質問だが、意味的には「オレをなめるなよ」といった内容を含意する修辭疑問文である。ここでの論点は、教師が authentic で meaningful かつ personal な発問をする際に、生徒は様々な質問に対する標準的な応答の仕方だけでなく、応答の幅を広げるための応答

方略 (responding strategies) の仕方を身につける必要があるということである。ここで言う応答方略は、上記のコミュニケーション方略の一種と見なすことができる。以下、yes/no 疑問文と Wh-疑問文それぞれについて、どのような応答の方略が考えられるかを見ていきたい。

#### yes/no 疑問文

yes か no かを問うのが、質問の基本である。教師は、yes/no 疑問文の作り方だけでなく、それらに対する応答の仕方を指導する。多くの場合、yes/no 疑問文であれば、yes か no で答えるというのが基本とみなされる。以下はその例である。

- (1) A: Is Taro happy?  
B: Yes, he is. / No, he isn't.
- (2) A: Do you know my mail address?  
B: Yes, I do.
- (3) A: Did I hurt your feelings?  
B: No, you didn't.

しかし、Is Taro happy? という質問に対して yes なら Yes, he is., no なら No, he is not. と応答する仕方しか知らないとすれば、そこには自然なやり取りが発生しないという可能性がある。また、Did I hurt your feelings? に対して No, you didn't. という応答は文法的に間違いではないが、相手の気持ちを配慮するなら、No. That's OK. などと応答したいところである。ここで必要なのが、応答方略である。というのは、第三者の状況を問う発問において推測は不可欠であり、「太郎は幸せか」という発問に対して応答することは必ずしも単純ではない。「太郎は幸せだと思う」「残念ながら幸せではない」「たぶんね」「それは疑わしいね」など、いくらでも応答の仕方があるからである。以下のような表現を使って、こうした思いを表現できることが、上記の authentic, meaningful, personal であることの条件を満たすことにつながるだろう。

Yeah, I guess he is happy. (うん、幸せだと思うよ。)

Well, I don't think he is happy. (幸せだとは思わない。)

Well, I'm afraid he is not happy. (残念ながら、幸せではない。)

I guess so. (たぶんね。)

I doubt it. (それは疑わしいね。)

I'm not sure. (よくわからない。)

Don't ask me. (私に聞かないで。)

一般に、yes/no 疑問文に対しては、yes であることもあれば、no であることもある。また、どちらとも言えない場合もあるだろう。仮に yes だとしても、強弱・濃淡のバリエーションを表現したいというのが、生徒の心理である。そういった気持ちを表現するために、以下のような表現を生徒のレパトリーに加えることが、生のやり取りを行うために求められる。

#### yes のバリエーション

That's great. (それはいいね) / Of course. (もちろん) / Yeah. (そうだね) / Sure. (いいねえ) / You better believe it. (実はそうなんだよ) / Uh-huh. (そう) / OK. (いいよ) / You bet. (もちろんさ、そうだと) / I think so. (まあそうだね)

#### no のバリエーション

Uh-uh. (いや) / Can't do it. (無理だよ) / Probably not. (たぶんちがうよ) / Impossible. (ありえない) / By no means. (絶対ない) / No way. (だめ)

#### yes と no とも言えない場合

Yes and no. (状況により、イエスでもありノーでもある) / Sort of. (まあそんな感じかな) / More or less. (まあね) / In a sense. (ある意味ではね) / It [all] depends. (場合によりけりだね) / It's up to you. (あなた次第です) / Let me think about it. (ちょっと考えさせて)

これらは全て定型的なチャンクとして、単語を覚える感覚で身につけることができる。こうした表現を用いることで、例えば以下のような会話が教室内で可能になるはずである。

A: Takeshi, are you going camping this weekend?

B: It all depends.

A: It all depends on what?

B: It all depends on who's coming, where the site is and what time we're coming back.

ここで Are you going camping this weekend? に対して、yes か no かのいずれかで応答する手段しかもっていなければ、会話の展開に弾みが見つからないのは明らかである。It all depends. と応じることで、相手に It all depends on what? というリアクションを呼び起こし、それに対して何とか応えようとするところに、コミュニケーションが立ち現われてくるのである。



## Wh-疑問文

yes/no 疑問文だけでなく、以下のような Wh-疑問文も日常的に用いられる。

Wh-語 : what, who, when, where, whose, why, how, how many, how long ....

以下はいわゆる 5W1H に関する質問例である。

Who is the right person for this task? (この課題には誰がぴったりの人だろうか。)

What do you want to eat for supper? (夕食は何を食べたいですか。)

When is your birthday? (あなたの誕生日はいつですか。)

Where's the trash can? (ゴミ箱はどこですか。)

Why did you call me last night? (なぜ昨夜、電話してきたのですか。)

How did you do that? (どうやってそれをしたのですか。)

いわゆる 5W1H の疑問文を尋ねられた場合、who と what, when, where に関する質問は、事実を問うものであるため比較的答えやすい。一方、how と why は答え方に多様性があるため、往々にして難しい。これは日本語での会話でも同様である。

(1) A: Who did it?

B: John.

(2) A: When were you born?

B: In 1995. I was born in 1995. I'm thirteen years old.

(3) A: Why do you want to go to India?

B: Because I like the place. I heard a lot about India. I'm interested in their way of life.

(4) A: How can we save the lake?

B: That's a difficult question. I don't know the answer. But I think there is something we can do.

Chuska (1995)は、質問が難しすぎたり、曖昧で答えにくいものであったりする場合、生徒は積極的に応答することを躊躇し、それが学習の機会を損なう可能性があるとして述べている。そこで必要なのが応答方略である。特に第二言語学習者の場合には、言語的にも応答に窮することが予想されるが、そうした言語的な不足感を補うためにも、応答方略を指導することは必要不可欠である。例えば、When did you come to Japan? (いつ

日本に来たの)と尋ねられて、「3年前」だとすれば、**Three years ago.**と答えればよい。それに対し、**How do you make an origami?** (折り紙はどうやって作るの?)と訊かれた場合、答えるのは困難である。そこで、以下のように応答するのも一つの方略である。

It's hard to explain. (説明するの、難しいな。)

OK. Look. Like this. You see? (うん、見てて。こんな感じ。わかった?)

一般に応答することの難しい Wh-疑問文に対しては、以下のような表現を駆使して対応できるようにしておけば、学習者自身が会話の流れを調整すること (conversational management) ができるようになるはずである。

I don't understand your question. (質問が理解できません。)

Could you be more specific? (具体的に言えばどういうことでしょうか。)

I don't know how to answer it. (どう答えて良いかわかりません。)

Sorry, I don't like to answer it. (ごめんなさい。答えたくありません。)

Let me think about it. (考えさせてください。)

I don't have the answer. (答えを持ち合わせていません。)

I don't know. (さあね。)

That's a good question. I'll think about it. (いい質問ですね。考えてみます。)

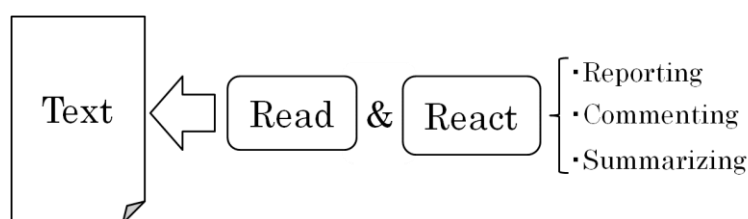
ここでの論点は、応答方略としてこれらの表現を英語学習の初期の段階で導入しておくことが、教室内でのやり取りを活性化させる鍵となるということである。

### 『コミュニケーション英語』における発問力

現行の学習指導要領に基づき、高等学校では「コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲ」の授業が展開されている。「英語の授業は英語で行う」ことが原則になりつつある中、教師の発問力の重要性はますます高まっている。われわれはコミュニケーション英語の授業を実践する上で鍵となるのは、“read and react”という概念であると確信している。“read and react”は、テキストを読み、それに対して何らかのリアクションを行うことであるが、特に“and react”の部分が重要となる。従来の英語の授業では、教科書を中心とするテキストを読み、内容を理解するという“read”の部分のみに焦点が当てられてきたが、むしろ重要なのはその内容に対してどのようなリアクションを行うのかという側面である。

リアクションは、突き詰めれば (1) reporting, (2) summarizing, (3) commenting の3つの要素から成る。事実 (fact) と意見 (opinion) との関係から言えば、

reporting（報告）は基本的に“fact statement”とリンクし、commenting（コメントを述べる）は“opinion statement”とリンクする。reportingとは、テキストの内容を登場人物や時系列、因果関係などの観点から再構成することであり、態度としては報道的な「直接・間接話法」の語り口を採る。一方、commentingはテキストについてどう感じたかを表現する行為であり、主観的な語り方である。そしてsummarizingは、個人がテキストをどのように読んだかを反映した語り方であり、個の視点が関与すると同時にテキストに内容的基盤を置くという意味においてfactとopinionの中間態（融合）として位置づけることができる。



われわれは、生徒をテキストと対話させる上で、上記の reacting は不可欠だと考える。そして、reporting, commenting, summarizing を行うための下準備として発問を投げかけることが、英語で授業を展開する上で有効な方法であると考え。reporting のための発問は、当然、テキストについて yes / no, A or B, 5W1H を問う形で行われ、それに対する回答がテキストを再構成するための素材を提供する。同様に、commenting を促し、支援するための発問もあるだろう。テキストの中で印象に残ったことは何か、筆者の見解に賛成か反対か、自分が主人公の立場だったらどうするかといった一連の発問を投げかけることで、生徒が commenting という言語行為を行う契機となる。また、発問は summarizing を行うための視点を提供するという役割も果たす。何が主題であるか、重要な箇所はどこか、どのような論理展開になっているかといった一連の問いに答えることを通し、生徒は summarizing を行う上でどのような点に着目することが必要であるかを学び、その力を高めることができる。

以上のように、発問を効果的に用いることにより、reporting, commenting, summarizing を軸とした read and react の活動を充実化することが可能になる。

## おわりに

教師の発問力は、授業の成否を左右する大きな要因の一つである。発問とは、文字通り問いを発するという行為であるが、そこには対人関係機能、情報収集機能、意味生成機能が含まれ、様々な目的をもって行われることを、意識しなければならない。また、多種多様な発問に対し、応答の仕方も多種多様であるため、応答方略を学習の初期段階から指導することも必要不可欠である。さらに言えば、発問を軸とした活動

型の授業を展開するために、authenticでmeaningful, personalなやり取りを生み出すような授業展開を組み立て、それに沿った学びの空間を創出することができるかが、英語教師にとっての挑戦となる。

#### 参考文献

Chuska, K. (1995). *Improving classroom questions: A teacher's guide to increasing student motivation, participation, and higher level thinking*. Bloomington, IN: Phi Delta Kappa Educational Foundation.

Morgan, N., & Saxton, J. (1991). *Teaching, questioning, and learning*. New York: Routledge.

Sanders, N. M. (1966). *Classroom questions: What kinds?* New York: Harper & Row.